公開講演会記録

日本の夜明けとフルベッキ博士

元明治学院大学客員教授・東北大学博士（文学）　中島耕二

はじめに

フルベッキの名は歴史に関心のある人々の間では知られているが、一般には馴染みが薄いと思われる。本講演ではフルベッキが日本の近代化にとって極めて重要な働きをした人物であったこと、そしてその背景となった「人となり」を紹介したい。

フルベッキは１８５９（安政６）年秋にアメリカ・オランダ改革教会の宣教師として来日した。英語名をギドー・ヘルマン・フリードリン・バーベック（Guido Hermann Friedolin Verbeck）と言ったが、日本ではオランダ語訛りでフルベッキと呼ばれ、親しまれかつ多くの人々から尊敬された。

彼は来日以来長崎で幕末期を過ごし、その間、大隈重信や副島種臣らに西欧の知識を授け、横井小楠の甥たちや薩摩藩士のアメリカへの留学の斡旋を行い、１８６９（明治２）年に明治新政府から招かれ上京し、お雇いとして、海外使節団、の提言、教育および法制度の整備、その他諸制度の建策など広い分野にわたって日本の近代化に貢献した。

１８７７（明治10）年に政府との契約が切れ、本来の宣教活動に復帰し新約聖書の改定、旧約聖書の翻訳、讃美歌の編纂、神学教育、教会支援および地方開拓伝道に専心し、日本のプロテスタント布教に大きな功績を残した。１８９８（明治31）年３月に東京で亡くなり、青山霊園に埋葬され日本の土となった。享年68歳であった。

フルベッキの生涯は次のように５期に時代区分できる。

①オランダ時代
　１８３０～１８５２年　22年間
②アメリカ時代
　１８５２～１８５９年　７年間
③長崎時代
　１８５９～１８６９年　10年間
④東京・お雇い時代
　１８６９～１８７７年　８年間
⑤東京・伝道時代
　１８７７～１８９８年　21年間

各時代はもちろん連続しているので画一的に線引きはできないが、それぞれ生

活環境が劇的に変化したという点で捉えやすくなっている。以下、順次フルベッキの生まれ育ったオランダ時代から彼の生涯をたどっていくこととする。

一、オランダ時代

フルベッキは１８３０年１月23日、オランダの小都市ザイストで生まれた。姉４人、兄１人、弟と妹が各１人の計８人兄弟姉妹の６番目であった。父はかつてザイスト郊外の小村ライゼンブルクに住み村長をつとめ、フルベッキの生まれる３年前にザイストに移った。村長は１８３６年まで続け、１８４１年から酢醸造工場を経営し、地主でもあった。

一家はルター教会信徒であったが、ザイストの町はモラビアン教会の拠点でもあり、ルター教会はなかったためモラビアン教会で礼拝を守っていた。フルベッキの姉や兄たちは学齢期を迎えるとアムステルダムのルター教会で牧師をしているおじのところに預けられ、ルター教会系の学校に通ったが、フルベッキや弟はザイストのモラビアン教会付属のアカデミーで中等教育を受けた。フルベッキの幼少時代は自然の中で伸び伸びと育ち、アカデミー時代にはモラビアンの教義とともに、オランダ語、ドイツ語、フランス語そして英語の４か国語を自由に操れるよう語学教育を受けた。

１８４８年に18歳でモラビアン・アカデミーを卒業し、ザイストの町の鉄工所で働き鋳物の製造や設計技術を身につけた。しかし、こうした生活には満足できず、おじに３年後に利子を付けて返済する約束をして借金を申し出て、ピアノ、オルガン、声楽、加えて英語およびフランス語の再学習に励んだ（１８５０年６月27日付けおじ宛の手紙。井上篤夫氏所蔵）。おじへの借金依頼は収入が乏しかったためと思われるが、父親の財力が落ちていたためか、あるいは父親に借財することを嫌ったためなのかは不明である。

フルベッキ家の親戚にはルター教会の牧師や宣教師となってインドネシアに伝道に赴く者、またザイストの町ではモラビアン教会付属アカデミーの牧師たちが宣教師となって海外伝道に出かけ、彼らが帰国後行う体験談を聴く機会も多く、青少年時代のフルベッキにとって「宣教師」は身近な存在であった。中でも１８５０年前後に聴講した中国宣教師のギッツラフの報告は記憶に残った。

フルベッキが22歳になる頃、兄弟姉妹のうち４人がアメリカに移住していたが、妹セルマの夫ジョージ・ファン・デュール牧師の誘いがあり、母の死を契機にフルベッキも成功を夢見て彼らを追って１８５２年９月２日希望の国アメリカへ渡った。

二、アメリカ時代

アメリカに到着後、義弟デュール牧師の縁故でウィスコンシン州グリーンベイにあるモラビアン教会のタンク牧師が経営するモラビアン・コロニー内の鉄工所で工員として働き始めた。やがてより良い待遇を求めて１８５３年11月、アーカンソー州ヘレナで橋梁建設の土木技師となった。多忙な日々を送る中、南部の黒人奴隷の過酷な労働の姿を目撃し、希望の国アメリカの負を知り心に強い衝撃を覚えた。知人の誰もいない地でフルベッキは魂の渇きに糧を求め、はるか遠い教会まで真の神の言葉を聴きに歩いて通った。翌年６月、酷暑からコレラに罹り骨と皮だけの重態となり生死の境を彷徨った。フルベッキは苦しみの床で身内に、病が癒えたら宣教に身を捧げると誓った。ようやく９月になって療養のためグリーンベイに戻り、健康を回復するとタンク牧師から鉄工所を借り受け技術者兼工場監督として働いた。しかし、工場経

営に失敗し事業家の才能のないことを自覚すると、先の神への誓いを果たすため教職者（聖職者）となる決心をした。

１８５５年６月、ニューヨーク州オーバンのオーバン神学校を受験し、これに合格し９月から神学生となった。オーバン神学校は長老教会が経営する神学校であったが、他教派の信徒にも扉を開いていた。義弟のデュール牧師もオーバン神学校で学んだ。在学中、フルベッキはドイツ語に堪能であったことからオーバン近郊のスプリングサイドのサンド・ビーチ改革教会で、助手としてドイツ系信徒向けに説教を担当することになった。この教会の牧師は、かつてマカオ、香港でモリソン記念学校の校長を務めたＳ・Ｒ・ブラウンであった。またこの教会で、のちに伴侶となるマリア・マニヨン（１８４０～１９１１）との出会いがあった。

オーバン神学校の卒業を控えた１８５９年１月、オランダ改革教会がオランダ語に堪能な日本派遣宣教師を探し、オーバン神学校校長がフルベッキを推薦すると海外伝道局から応募の要請があり、彼はこれに応えて面接試験を受け晴れて合格となった。同年３月オーバン神学校を卒業し、22日に長老教会カユガ長老会で按手礼を受領し、翌日オランダ改革教会に転籍した。

フルベッキはモラビアン教会で育ったが、教籍はルター教会信徒であった。アメリカに移住し長老教会の神学校であるオーバン神学校で学ぶ中で長老教会に転籍し、神学校卒業後牧師職に就くための按手礼を長老教会から受領した。しかし、すでにオランダ改革教会の宣教師に選ばれ日本への派遣が決まっていたことから、翌日、オランダ改革教会へ教籍を移したのであった。４月15日にフィラデルフィアで婚約中のマリアと義弟デュール牧師の司式により結婚式を挙げ、５月７日、同じオランダ改革教会遣日宣教師のＳ・Ｒ・ブラウンとその家族およびＤ・Ｂ・シモンズ夫妻とともにニューヨーク港から日本に向け出航した。

三、長崎時代

Ｓ・Ｒ・ブラウンおよびＤ・Ｂ・シモンズは神奈川に、フルベッキは長崎に任地が決まり身重の妻マリアを上海に残し、１８５９年11月７日夜半長崎港に到着した。翌朝、先任のアメリカ監督教会（アメリカ聖公会）宣教師Ｊ・リギンスおよびＣ・Ｍ・ウイリアムズを宿舎の崇福寺に訪ね、しばらく同宿の好意を受けた。市中に住まいを見つけ年末にマリアを迎え長崎における伝道活動を開始した。翌年１月女児を与えられたが、幼い命は２週間後天に召された。フルベッキ夫妻の日本における最初の試練であった。

フルベッキは切支丹禁制下日本人への直接伝道ができないため、病気で帰国したＪ・リギンスの文書頒布を引き継ぎ、日本語の学習を兼ねて長崎唐通詞への英語指導と自宅での英学教育を始めた。この自宅での授業は表向き英学塾であったが、自主的に通ってくる青年たちに秘密裡に聖書指導を行うクラスであった。

１８６３年４月、薩英戦争の風説で安全が保障されないとしてアメリカ領事館から警告が出たため、家族で出島に、さらに上海へ５か月にわたって避難を余儀なくされた。長崎は決して外国人が安心して生活できる場所ではなかった。それでも、やがてフルベッキの学識および高邁な人格が、何礼之および平井義十郎ら唐通詞トップを通じて幕府側に知られ、１８６４年に長崎奉行所の英語稽古所（のちの済美館）に高給で迎えられることになり、多くの有為の青年たちを指導する機会を得た。

１８６６年には佐賀藩家老村田若狭守政矩とその弟、綾部幸熙に日本で３番目

のプロテスタント信者として洗礼を授けた。これはまだキリスト教の伝道も信仰も厳禁であった中での大きな実りであった。また横井小楠の甥の横井佐平太と太平のアメリカ留学の斡旋もこの年に行った。翌年には薩摩藩士5人の紹介状を海外伝道局に書いた。この頃フルベッキの評判を聴いて金沢藩、薩摩藩、土佐藩そして佐賀藩の各藩主名で洋学校設立の依頼が届くほどになった。

1868年1月に佐賀藩長崎蕃学稽古所（のちの致遠館）に招かれ、佐賀藩士を中心に西欧の新知識を講義した。こうしてフルベッキは済美館および致遠館で教師として、のちに明治新政府の要職に就く幾多の人材を指導した。中でも大隈重信や副島種臣らはアメリカ憲法および憲法釈義、哲学、民法、刑法、経済原論、商業学、国際法、統計学などフルベッキからじきじきに新知識を学んだ。

1869年2月、明治新政府の遣いとしてかつての教え子の山口尚芳が来崎し、政府の教育顧問就任の要請を伝えた。フルベッキはこれに応えて3月23日、家族で長崎を出航し東京へと向かった。

四、東京・お雇い時代

1868年3月14日、新政府は五箇条の誓文の宣布を行った。天皇は第五条で「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」と神々に誓いを立てたが、政府は翌日、五榜の掲示を掲げ第三札で「切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ」とし、キリスト教抜きによる西欧文明の摂取方針を宣言した。ところが「切支丹邪宗門」としたため政府は各国公使から抗議を受け、慌てて「切支丹宗門之儀ハ是迄御制禁之通固ク可相守事」「邪宗門之儀ハ固ク禁止候事」と別書きして対処した。

フルベッキら宣教師は、明治新政府の樹立によりキリスト教政策の転換を期待していたが、幕府時代の政策が踏襲され、加えて1868年7月11日には浦上キリシタンの各藩への流配が実行され、むしろ旧幕府時代よりもキリスト教弾圧が強化されたことに大きく失望した。フルベッキはこうした中で、1869年4月1日から同年9月末日まで大学南校の語学および学術教師として、年俸5千元（円）という破格の待遇でお雇いとなった。そこで、新政府のキリスト教解禁を促すため、同年6月11日に米欧使節派遣に関する稟議書（ブリーフ・スケッチ）をかつての教え子で、新政府の外国官副知事兼会計官副知事になっていた大隈重信に手交した。

当時フルベッキは「私はしばしば国家の福祉を増そうと願う聡明な人たちから、政治の諸形態、諸外国の法律、司法行政、国家相互間の政治的平等、教育方法、宗教制度、その他西欧文明に関するこの種の諸問題について質問を受けている」ことが稟議書提出の動機であったが、真の目的は付則の「信教の自由に関する覚書」にあった。欧米の法治国家では「一国の人民は自己の良心に従い、その宗教上の見解をもち、礼拝を行うことは許されている」ことを政府の指導者たちに見聞してもらうことを願った。

大隈はブリーフ・スケッチの提言を実行するため「大隈使節団」を米欧に派遣することで閣議の内定を得た。大隈は「使節団派遣の事は、素と余の発議にかかり、余は自ら進んで使節の任に当たらんことを望み…」（『大隈伯昔日譚』）と回顧録で語っている。ところが当時、大隈に対し薩長派から反発が大きく、最終的に「岩倉使節団」に取って代わられ、またフルベッキがブリーフ・スケッチで長文をもって調査・研究を提言した宗教項目をその目的から表向き削除し、内密に行うことにした。

フルベッキはその後、1873（明治6）年9月12日に解傭となるまで、大学

南校（のちに南校、第一大学区第一番中学と改称）の教師、教頭を務め、教頭時代には月俸６百円という右大臣岩倉具視と同額の高給で遇された。ただし、教頭のその職務はカリキュラムの整備、外国人教師の採否、留学生の斡旋などで、学校運営および生徒指導は含まれなかった。お雇いはあくまでも助言的業務に限定されていた。フルベッキのスタンスはブリーフ・スケッチを除いては、政府の意向に沿って建策を行うという立場を貫いた。これが政府から信用を得た根源でもあった。

大学南校では17歳で教員をしていた高橋是清の面倒を見たが、その後高橋はフルベッキの書生となり親しく指導を受けた。

フルベッキは政府の文明開化策のうちドイツ医学採用、平民の苗字使用、脱刀、断髪（散髪）、廃藩置県、裁判所設置、新紙幣発行、統計編纂、師範学校開校、公園設置、公共図書館設置、学制公布、太陽暦採用、新時刻法制定、一六休日制の日曜休日化など、そのかかわりの度合いはともかく、多くの相談に与り提言、建策および助言を行い、日本の近代化を推進するいわば新政府の最高顧問的立場にあった。

ブリーフ・スケッチに基づいて実行された岩倉使節団の米欧派遣は、訪問各国政府をはじめ民間からも日本のキリスト教徒弾圧と禁教政策を非難され、将来の条約改正交渉にも不利になることを使節団幹部に知らしめることになり、フルベッキの意図した通り、１８７３（明治６）年２月24日の切支丹禁制の高札撤去につながった。しかし、一方で各国の教育現場の視察によって木戸孝允や田中不二麿らに、その教育に色濃くキリスト教会の勢力の影響が見られることを認識させ、教育と宗教の分離思想を植え付けることになり、岩倉たちより一足早く帰国した田中と木戸によって８月28日付けで「教導職の学校教員兼務禁止」の文部省布達第１１５号の公布をもたらした。この布達によってフルベッキは前述の通り、第一大学区第一番中学教頭の職を失うことになった。

第一番中学を解傭されたが、フルベッキはそれまでの政府への功績を評価され、12月１日から正院、左院、その廃止後は元老院の翻訳局法律顧問として５年契約でお雇いが継続された。月俸は４００円と下がったが、それでも次官級の厚待遇であった。

ちょうどこの年の８月、フルベッキにオランダ改革教会と関係の深いラトガース大学から名誉神学博士の学位が授与された。彼は海外伝道局書記のフェリスにその望外の喜びと推薦者への感謝を伝えた（『フルベッキ書簡集』２３２頁）。

前便の書類によって、わたしがラトガース大学から神学博士の名誉学位を授与される光栄をえたことを知って驚きました。――それは全く予期しない恩恵で、事実全くの驚きであり、分不相応な恩恵であると感じていることを告白しなければなりません。ラトガース大学の教授会についで、この好意に感謝しなければならない人、それが誰であろうとも――あなたは最もよく知っておられるかもしれませんが――その人をわたしは知ることができたらと思います。その贈り物を高く尊び感謝して受領いたしますが、学位授与を示唆してくれた人の親切な気持ちをなおいっそう高く尊び、いっそう深く感謝している次第で、神はわたしを祝福し、この称号を謙遜と敬意をもって、受領することをゆるして下さいました。

翻訳局勤務となったフルベッキは、局長の箕作麟祥のもと精力的に以下の各国法典の翻訳に従事した。彼の翻訳本のほ

とんどは現在国立公文書館に所蔵されている。

『フランス森林法』
『日耳曼〔ゲルマン〕議院之法』
『国政党派論』（杉亨二筆記）
『法学指鍼』（桜井能監筆記）
『公園各規摘抄』（口訳）
『和蘭墓地規則』（口訳）
『専売免許開版免許訳文』（口訳）
『仏朗西銀行定規』（読授）
『コートナポレオン付録目次』（読授）
『独逸連邦及各国刑法比較書』（講）
『人民集会規則』（読授）
『丁抹〔デンマーク〕国憲』（口訳）
『伊太利国憲』（口訳）
『独逸国憲』（口訳）
『アメリカ合衆国特許法』
『アメリカ合衆国著作権法』

この時代のフルベッキの仕事ぶりについて、同僚の宣教師ワイコフは次のように書き記している（Japan Evangelist, No.5, 1884）。

フルベッキ氏は夜の時間を猛烈な読書と研究に消費せざるを得なかったのです。氏があるとき筆者に語ったところによれば、政府へのお雇い期間中は読書とその結果を説明するのに忙しく、仕事の大部分を口頭で行っていたため、ものを書く時間も機会も持てなかった。その結果、筆下手になってしまった。

またワイコフは後年、フルベッキの長男ウイリアムズの父親の読書に関する談話を紹介している（The Japan Evangelist, No.9, 1909）。

父は雑読家で、読んだものはすべて記憶するという素晴らしい能力を持っていました。数年前に読んだ本に触れるときでも、探すものがどの頁にあるか、さらにその頁のどのあたりまでも知っていたのです。父は記憶は連想によって行うものと信じていて、頁の縁につける印で記憶し、知識を系統化する手助けとしていました。

フルベッキは、自ら勉強し理解したことを、すべて記憶し翌日には日本人同僚に口述するという毎日であった。これは長崎時代も同じ勉強法によって、済美館および致遠館の授業を行っていたと思われる。

フルベッキと政府の契約は１８７７（明治10）年６月23日、当初の契約より若干早く終了となった。これは西南戦争による政府の財政難と関係している。そして、７月には多年の政府への功績によって勲三等旭日中綬章が贈られた。先にラトガース大学から名誉神学博士の学位を贈られ、今回は日本政府から外国人最高の栄誉に浴した。フルベッキは海外伝道局書記フェリスに次の通り叙勲の意義を伝えた（『フルベッキ書簡集』２３６～２３７頁）。

多方面にわたり、長い間の政府との関係が有効かつ満足すべき終結を見ましたので、天皇陛下から、かたじけなくも、勲三等旭日章を授与される光栄に浴しました。

わたしは宣教師の肩書を帯び、いつもミッションのために闘ってきましたし、また常に恩寵の下に、ピリピ書四章八節で、パウロが勧めているように、これらの善き行の闘士であったから、わたしに与えられたこの光栄は宣教のための間接的讃辞と考えてよいでしょう。たしかに、そうであります。もし政府がプロテスタント・ミッションに対して敵意を抱いているならば、このような処置はとらなかったでありましょう。

フルベッキは同年秋に残務処理を終え

て元老院を去った。47歳になっていた。

五、東京・伝道時代

フルベッキは伝道活動に復帰し、最初の任務は同年10月7日に築地居留地六番に開校した東京一致神学校（のちの明治学院神学部）の講師であった。弁証論と説教学を担当した。教会活動ではただちに新約聖書翻訳改定委員および旧約聖書翻訳委員に選ばれた。一方、政府から華族学校の顧問の委嘱を受け、一度は断ったが宣教師の手当だけでは家族10人の生活は厳しく、ほかに収入の道も見つからないことからこの仕事を引き受けた。契約は１８７７（明治10）年11月20日から学事顧問として、翌１８７８（明治11）年7月15日満期雇止メまでであった。

フルベッキは華族学校との契約が終了すると、賜暇休暇を取り体力を取り戻すため一時帰国することにした。7月17日に多くの友人、知人によって送別会が催され、餞別を受領して、7月31日に一家10人でカリフォルニアに向かって横浜を後にした。

１８７９（明治12）年9月13日、フルベッキは2年間の休暇を終えて鋭気に満ちて横浜に戻った。ただし単身であった。これは子どもたちの教育と家族の生活を考えての決断であった。早速、もとの宣教師生活に戻り、東京一致神学校および華族学校での授業、聖書の翻訳委員、改正讃美歌委員、諸教会での説教など多忙な日々を迎えた。翌１８８０（明治13）年1月から地方伝道に着手し、在日オランダ改革ミッションの宣教拠点である上田を中心に信州伝道に赴いた。その後、上田はフルベッキにとってたびたび訪れる伝道地となった。夏に妻のマリアが年少の4人の子どもを連れてサンフランシスコから日本に向かったが、船中で生後5か月の幼子が亡くなり、フルベッキは我が子の亡きがらが初対面となった。

フルベッキの宣教師活動は多忙を極めた。「日曜説教は平均週2回、一致神学校での授業は弁証論と説教学、自宅では毎週、バイブル・クラス、家族学校では、月3回の講義、中会のための翻訳の仕事、その他臨時および定期的な会合に出席する度数も相当多く、時々は地方へ伝道旅行に出張することなどがあります」（『フルベッキ書簡集』２６９頁）と報告している。

東京一致神学校と華族学校の授業は、フルベッキが使命と考える聖書の翻訳と直接伝道に時間的制約となることから、どちらかを辞めたいと考えた。華族学校はキリスト教伝道と直接結びつかなかったが、講義の対象が政府の高官たちであり、帝国議会の開設と憲法の発布が10年後に行われることから、憲法草案に何らかの影響力を確保するためにも、高官たちとのパイプは確保しておくべきと考えた。しかし、それは直接伝道を犠牲にしてまで効果があるとは思えないとの結論に達し、１８８１（明治14）年11月4日に華族学校長に辞任の手紙を出状した。

その後のフルベッキは、近隣教会での説教、旧約聖書の翻訳、新撰讃美歌の編纂、教会全体会議における議長、地方教会の設立支援活動、キリスト教雑誌への定期投稿、明治学院神学部教授、明治学院理事および理事会議長、関東一円、信州、名古屋、高知、広島、北陸、盛岡、青森への伝道出張など生活のすべてを日本の伝道に捧げていった。１８８５（明治18）年10月妻のマリアは成長した子どもたちを連れて、カリフォルニアで暮らす年長の子どもたちのもとへ旅立って行った。東京女子師範学校次いで立教女学校の教師となった二女のエマだけが東京に残り、フルベッキと同居した。その後、2回の休暇による一時帰国を除いて

別居の生活を続けた。

フルベッキはオランダを出国し国籍を失い、アメリカでは市民権取得の機会を失い、無国籍人であった。明治政府はフルベッキの願いに応え、日本への貢献を感謝し、１８９１年７月４日、外務大臣榎本武揚の署名捺印による家族全員の国内旅行と居住の自由の特許状を発行した。しかし、特許状の恩恵を受けたのはフルベッキ本人とエマの２人だけであった。

１８９７（明治30）年10月以降フルベッキは持病の腎臓病と膀胱疾患の悪化により、医師からすべての地方出張を禁じられた。翌１８９８（明治31）年３月10日正午、突然心臓麻痺で召天した。享年68歳であった。同月13日芝教会で葬儀が行われ、明治天皇から５００円の下賜金が贈られ、棺は近衛儀仗兵に守られ青山霊園に埋葬された。

おわりに

フルベッキはキリスト教宣教師として布教のために来日したが、当時、日本はキリシタン禁制であったことから、欧米の法治国家では「一国の人民は自己の良心に従い、その宗教上の見解をもち、礼拝を行うことは許されている」ことを日本で実現するため、日本の文明開化を促し日本の近代化に全能力を費やしてその半生を捧げたのであった。フルベッキがいなければ、日本の近代化は遅れていたに違いない。

フルベッキの人となりは、彼の同僚宣教師ワイコフが的確に語っている（Japan Evangelist,No.9, 1909. 砂田良和訳）ので、その言葉を引用しておわりに代えたい。

彼は極端に謙虚な人でした。その謙虚ぶりとは、自らを謙遜するのではなく、自分のことに触れることが避けられるなら努めて触れないという姿勢でした。彼は物欲のない人でした。人にものを上げるという点においては、彼は気前が良かったという以上の説明ができないのです。彼は愛情の深い人でした。彼は明朗な人でした。相手の母国語で自由に話をし、音楽の才能を持ち、頼まれれば即座に楽器を奏で歌いました。ユーモア精神に富んでもいました。彼は「神と共に歩み、神が彼を取られたので、いなくなった」のです。

〈一次資料〉
高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』（新教出版社、１９７８年）
森田正ほか「フルベッキ博士長崎時代の書簡」『近代国家「明治」の養父G・F・フルベッキ博士の長崎時代』（長崎学院長崎外国語大学、２０１６年）

（２０１９年10月31日・公開フォーラム）

筆者略歴（なかじま　こうじ）
１９４７年生まれ。東京世田谷育ち。海城高校から明治学院大学法学部、イタリア国立ミラノ大学政治学部留学を経て、東北大学大学院文学研究科歴史科学専攻博士後期課程修了。東北大学博士（文学）。明治学院大学非常勤講師、客員教授を歴任。現在、長崎外国語大学客員研究員。専門分野は日本近代政治外交史、日本キリスト教史。著書に『長老・改革教会来日宣教師事典』（共著、新教出版社、２００３年）、『近代日本の外交と宣教師』（単著、吉川弘文館、２０１２年）、『明治学院百五十年史』（編著、明治学院、２０１３年）ほか多数。